

エイサー

使者の踊りを再び

エイサーは、昔から太陰暦の7月15日に先祖を供養する盆（旧盆）で踊られてきた沖縄の民族舞踏です。おそらくは、第二次世界大戦とその後の人口移動が起こした混乱のために渡嘉敷でのエイサーの伝統は途絶えていました。ですが島が観光地として発展する中で、伝統的な沖縄文化を提供して観光客にとっての島の魅力を高めるため、住民たちはエイサーを復活させました。

渡嘉敷青年会がエイサーを再開したのは1996年です。忘れられた舞踏を学ぶため、青年会は那覇に近い浦添との知識交換を計画しました。渡嘉敷の若者たちが沖縄の伝統的な綱引きで使われる巨大なワラ縄の作り方を浦添の人々に伝え、浦添からは代わりに7つのエイサー一曲を学んだのです。

死者の祭りでは、先祖の魂が生前の家へ戻って寛ぎ、楽しむと信じられています。エイサー演者の役割は、太鼓、踊り、歌を通してそれらの魂を正しい家へと導くことです。そのため、彼らが歌う曲の歌詞は非常に実用的で、「間違った場所へ行かないでください。あなたの求める家はここです。さあ楽しんでください！」というのがその基本的な内容です。

渡嘉敷のエイサー隊は、3日間続く死者の祭りの最初の2日間演舞を行います。初日（先祖を迎える「ウンケー」）は渡嘉敷と渡嘉志久の村で踊り、2日目（真ん中の日である「ナカビ」）は阿波連で踊ります。最近亡くなった人のいる家の前か、運を招くために最近始まった事業所の前で踊ります。

渡嘉敷のエイサーには、三線を引く音楽家の地方、肩から飾り帯をかけ踊りを披露する大太鼓または細やかで繊細な音と軽妙な踊りを披露する締太鼓の打ち手、そして指示を叫んで演舞全体が円滑に進むようにまとめる熟練者のチョンダラーという３種類の演者がいます。

鼓手が身につけるのは黒いベストに黒い帽子、白いショートパンツ、そして「いつ（五つ）の世（四つ）までも、末永く」を意味する４つの四角と５つの四角の模様が入った帯です。彼らは肩から下げたたすきで支えた樽型太鼓と、それより小さく手で持てる高音の締め太鼓を組み合わせて演奏します。一方でチョンダラーは顔を白塗りし、円錐形のワラ帽子と白黒の縞模様の上着を身につけます。

渡嘉敷青年会は、渡嘉敷マラソン大会、春のゴールデンウィーク中、そして渡嘉敷祭りでもエイサーを披露します。７月と８月には毎週土曜日に阿波連で３０分の演舞を行い、それに花火ショーが続きます。（コロナ対策により休止中）